

学校歌における空間表現を用いた特徴づけ

—徳島県の高等学校を事例にして—

教科・領域教育専攻

社会系コース

木内 桂吾

指導教員 立岡 裕士

I はじめに

個々の学校という組織を母体として作成される団体歌を本稿では学校歌と呼ぶ。いわゆる校歌は、それぞれの学校が公的に設定した、代表的な学校歌であり、それ以外にも「生徒会の歌」や応援歌・寮歌など公的・制度的な支持のないものなどがある。

学校歌の中でも校歌および旧制高校の寮歌に関しては、社会・制度的な側面や学校歌の歌曲と歌詞の両面から分析が行われており、歌詞に関しては①校歌にうたわれることの有無によって、個々の風景要素の影響力を推定しようとするもの、②校歌の内容から当該地区の住民の風景イメージを探ろうとするものに分けられる。②の研究では多くの場合、当該学区の住民のイメージを探ろうとしているが、現代の日本で、一つの学区の住民がその学校の卒業生であるということは先験的に認めうる事態ではない。また校歌が与える在校生や卒業生の風景観への影響も、素朴な懐旧意識と整合的ではあるが、それだけでは根拠となすに足らない

また従来の研究では校歌のみを研究対象としてきたが、渡辺（2010）のように校歌を共同体歌として位置づけるのであれば、校歌だけでなく、学校という場に基づくさらに別の歌も同様の性質を持つものとして、分析の対象に含まれるべきである。つまり学校歌を対象とすること

により、一つの学校について複数の時点の歌を検討することができるため、時代の変化の影響も検討できると考える。

また、共同体歌として利用する、つまり集団の一体感を醸成するという点では、学校歌は学校内で共有体験として歌われることだけではなく、対外的に歌うことによる差異化の面も考えられる。したがって、学校歌は学校内外に対する自己表出として検討することが可能になる。

個人のアイデンティティ形成は、自己を環境のなかに定位させることで可能になる（保坂・山住, 2000）。そして定位には時間的・空間的・社会的側面があり、アイデンティティ形成の機能をもつ学校歌においても、それぞれの学校が一定の時間・空間・社会のなかに位置づけられると考えられる。

本研究では、時間・空間・社会が学校を定位させる準拠枠としてどのように構成されているか、という点に着目して学校歌を分析したい。個々の空間表象ではなく、時間要素も含んだ重層的な空間の表現を問題とするのである。

研究対象は徳島県の高校（およびその前身校）を選んだ。高校を対象とするのは、普通校・実業校など、小学校・中学校に比べて学校の性格に違いがあり、それが校歌に反映していると指摘されている（牛島, 2004）ためである。

II 徳島県の高等学校の概要

1947年度末、県内には35の県立の中等学校があった。しかし1948年、共学・小通学区制・総合制の徹底を求める占領軍の指令により直ちに再編を余儀なくされた。総合校になるにあたって、単独で新校に改変されたものや統合によって総合化したものがある。しかし、総合制は成功したといいがたく、普通校・実業校への分化が進んだ。2004年以降は学校統廃合の動きがみられ、2017年1月現在、県内には32の公立高、3の私立高がある。

Ⅲ 学校歌の歌詞の検討

徳島県内にある高校とその前身校の学校歌（総数133）の歌詞を資料として、(1)学校自体についての表現、(2)学校の所在地についての表現、(3)視野の空間的広がりを示す語(4)視野の時間的広がりを示す語を摘出し、次いでそれらがどのような連関のなかに置かれているかを考察し、さらに立地の違い（海・剣山）、校種（学科）差、時代差の観点から比較分析を行った。

・立地の違い

海は臨海部の学校の学校歌の中で歌われ、吉野川はその流域で歌われている。しかし、徳島市所在校でも、鳴門渦潮を歌っているものもあり、近在性を前提にうたうわけではない。逆に臨海部にあっても海を取り上げていない学校歌もあり、臨界性は海を歌うことの十分条件ではない（吉野川についても同様）。

剣山も地形の計算上は徳島市街地の大半で見ることができる一方、富岡や三好市からは見えがたいことがわかった。しかし徳島市街地の学校では剣を歌う学校もあるが全てではない。逆に、剣山が見えがたい富岡や三野の学校歌では剣山を取り上げている。このことは、校歌詞が物理的世界の客観的報告ではなく、観念的記載であることの一例である。

・校種差

牛島（2004）は、日本を念頭に置いた農業・工業・商業の発展を歌い込む点で実業高の校歌は普通高の校歌と違うと指摘していた。しかし徳島の高校では、その傾向は、工業高では顕著に見られたものの、農業高ではさほど明らかではなく、商業高ではほとんど見られなかった。

・時代差

戦前の校歌では学び舎を光で容するものが多かったが戦後はこの表現は少ない。「聳える」という表現も戦前には用いられていたが、戦後にはほとんど用いられない。

空間表象の使われ方は、戦前では天皇に直結する意識がうたわれていたが、戦後ではなくなっていた。2004年以降の統合により新設された学校の校歌では固有名詞を持たない空間表象を用いることも新しい傾向と考えることもできるが、従来のように具体的地物に依存するものもある。

Ⅳ まとめ

徳島県の高等学校は1948年に総合制の徹底のもと再編を余儀なくされた。単独新設するものもあれば、統合により新たに学校が設置されたものもある。校名の変更により校歌も新たに制定されるもの、前身校の校歌をそのまま継承するものがあった。

従来の研究では歌詞に地物が取り上げられるのは学校の近在に存在するからであるという考え方に十分な根拠をもたないことを、臨海部であつても近在性を考慮せず歌われているものや、可視性において見えがたいのに歌っている校歌が存在し、追加的に明らかにすることができた。一方、徳島においては校種差において顕著な違いは見られず時代差においても新たな見解に達することはできなかった。